世界観の「違う」人と「重なる」

文学部人文・ジャーナリズム学科
協力講座「報道写真論」
長倉洋海さん「報道写真が持つ力と可能性」語る

フォト・ジャーナリストの長倉洋海さんを講師に迎え、文学部人文・ジャーナリズム学科と日本写真家協会の協力講座「報道写真論」（前期）が生田キャンパスで行われた。長倉さんは報道写真が持つ力と可能性を、学生100人に語った。

長倉さんは、中央アジアのアフガニスタン、中米エルサルバドルなど世界の紛争地や辺境の地域で、精力的に取材を続けている。

とくにアフガニスタンの抵抗運動の指導者で2001年の「9・11同時多発テロ」直前に暗殺されたマスード（アハマド・シャー・マスード）とは20年にわたる親交があった。マスードの写真集『マスード　愛しの大地アフガン』で第12回土門拳賞を受賞している。

5月28日の講義は、長倉さんが担当した「フォト・ジャーナリズムの過去・現在・未来――時代を超えて残るものを目指して」（全7回）の最後の授業。

長倉さんは、2006年にフランス南部のペルピニャンで開催されたフォトジャーナリズム祭に参加した様子と、これまで撮影してきた数十枚の作品を紹介した。

エルサルバドルの難民キャンプの少女、アマゾンの先住民、パミールの子どもたち、タクラマカン砂漠、マニ旗におおわれた中国・青海省の大地、鮮やかな民族衣装をまとった新疆ウイグル自治区の女性、南アフリカのカラードの農園、釧路の炭鉱労働者、山谷の人々……。

長倉さんは一枚一枚を撮影した時代背景や被写体とのふれあいを紹介。駆け出しのころは、ジャーナリズムに多大な貢献をした作品に贈られる「ピュリツァー賞」にあこがれ、米写真誌「ライフ」の誌面を飾ることを夢見ていたが、次第に紛争地に生きる人々の気持ちに心を寄せて、シャッターを切るようになった。

「写真はファインダー越しで見る〝ディテール〟。その積み重ねによって世界が見えてくる。しかし、一面しか伝えられないというのも現実だ。見えない部分、伝えられないところまで切り込んでいくこと、想像力をはぐくむことが大切だ」と語った。

さらに「人はさまざまな世界観をもつ。異なる状況に置かれた人々を、我々と『違う』と感じるのではなく、『重なる』ものを見つけることによって、感情がつながるのではないか」。

30年以上にわたって写真の旅を続け、激動の世界の人々との出会いを重ねてきた長倉さんは、フォト・ジャーナリズムの可能性を語り、学生たちにメッセージを送った。

長倉さんは

※「報道写真論」の後半（6・7月）は写真家・英伸三さんが講義を行う。協力講座として今後、夏期休暇中に▽沖縄タイムス社との「沖縄ジャーナリズム論」、後期に▽読売新聞社との「政治ジャーナリズム論」▽毎日新聞社との「国際ジャーナリズム論」が準備されている。

▶ 学生に講義する長倉さん

人間科学部社会学科
加・トロント大教授を招き
社会関係資本・特別講義

人間科学部社会学科はカナダのトロント大学のボニー・H・エリクソン教授による特別講義を行った。エリクソン教授は同学部の秋吉美都教授と親交が深く、その縁で最新の研究成果を本学に披露することになった。講義は「社会意識論Ⅰ」（担当：嶋根克己教授）の授業時間に合わせ、5月18日、生田キャンパスで行われ、100人の学生と教員が聴講した。

エリクソン教授は社会関係資本（人間同士の社会的ネットワーク）論研究の第一人者。今回の講義では特に少数移民の社会関係資本に関する最新の研究成果を紹介。人間関係の強弱によってもたらされた効果の違いについて、さまざまな調査結果を挙げて説明した。

その中で、仕事探しに関する調査では、学歴と収入が高いエスニックグループでは同じグループの人に頼ることで良い仕事を得ることができるが、低いグループでは同じグループのつてでは思うような仕事に就けず、むしろ関係の弱い別のグループに頼る方が良い職を得られるという結果が出た。

しかし精神的サポートという面では、同グループの人との強いつながりによってより高い効果が得られるという。

最後に「日本の少子化問題は、移民を受け入れることが一つの解決策になるのでは。就労トレーニングや家族単位で移民を受け入れる政策を講じ、強弱両方のつながりを生かし、日本人と移民がお互いに助け合える仕組みをつくればよりよい社会ができる」と結んだ。

▲ 講義するエリクソン教授

「インタビューは難しいけれど楽しい」
人間科学部社会学科1年次生が「まちあるき」

人間科学部社会学科に4月に入学した1年次生が、社会学を学ぶイントロダクションとして企画されたフレッシュマン・セミナーの「まちあるき」に参加した。学生たちは小田急線・千代田線沿線の地域を歩きながら、社会学的なものの見方をとらえなおしてみる体験をした。

「裏道で知った新宿の意外な〝顔〟」
――後藤基礎ゼミ生

「まちあるき」は、5月19、20両日と同26、27両日の2回にわたって行われた。学生137人は、「基礎ゼミナール」（以下、基礎ゼミ）のクラスごとに分かれ、担当教員とともに、それぞれの地域を歩いた。

19日、後藤吉彦准教授が担当する基礎ゼミの学生11人の行き先は、東京・新宿。本クラスには、宇都榮子同学部長も同行した。

渋谷、池袋と並ぶ副都心で、日本有数の繁華街であり、オフィス街としてにぎわう新宿は、裏道に入ると意外な〝顔〟を持つ店やスポットがある。

午前10時過ぎ、まず訪れた歌舞伎町かいわいで、同町誕生時（1948年）から開業する小売り茶店を訪ね、さらに、ホストクラブ前でホストに〝突撃インタビュー〟。新宿駅前では、雑誌『ビッグイシュー』の販売員から話を聞いた。

その後、新宿2丁目周辺に移動し、自主流通出版物を扱う書店「模索舎」、インフォショップ「イレギュラー・リズム・アサイラム」と「カフェ・ラバンデリア」を訪れた。

訪問先は後藤准教授が「自分の好きなこと、やりたいこと、『自由』を大切にしつつ、生きる可能性や、人と人との思いがけない出会いの面白さを、学生に感じてもらえるような魅力的な人や場所」を選んだ。

長野県上田市出身の依田峻弥さん（人間科学1）は「新宿は大学受験の時に訪ねて以来で、その時はこの街の迫力にただただ圧倒された。今回の訪問で型にはまった仕事に背を向け、個性的な活動をする店や人々を知り、新宿の見方が変わった。インタビューは、本音を聞き出す難しさと共に、インターネットなどでは知りえないたくさんの発見があった」と語った。

▶ 朝の歌舞伎町・ホストクラブ前で

特別編　専大とともに　生田探索 ②
ブルーパブ「ムーンライト」
川崎初の地ビール店　体に優しくおいしい

生田キャンパスの周辺で学生たちに人気のあるお店やスポットを紹介する「専大とともに　生田探索」（特別編）。ジャーナリストを目指す内藤大地さん（平24文）が訪ねた。

◇

ブルーパブ「ムーンライト」は、欧米の伝統的手造り製法で醸造し（brew）、併設のパブ（pub）でビールを提供する川崎市初のクラフトビール（地ビール）店。

「おいしいビールをリーズナブル価格で」がモットー。ビール小ジョッキ300円～という安さだ。麦100％のビールを小型のタンクで醸造するため、少量でも多品種のビールを造れるのが特色。

パブでは、ラガー、ピルスナー、スタウトなど常時10種類のさまざまなクラフトビールを楽しむことができる。同店のビールは市販品と違ってガス圧が低く、炭酸が優しく体に作用するため、食事をしながら味わうのに最適。

「多摩の泉」「中野島」「枡形城」「登戸の渡し」など一つひとつに、一般公募の名前が付けられている。

今春、生田緑地に再オープンしたプラネタリウム「かわさき宙と緑の科学館」を記念して、産学官共同でクラフトビール「スピカ」（麦の穂の意）を開発。ネーミングとラベルデザインは、本学商学部の前川明彦ゼミ生が行った＝本紙5000号参照。

店主の山中貞博さんはJMA（日本マイクロブルーワーズ協会）会長。クラフトビール造りのパイオニア。永年にわたって極めてきた〝ビール道〟で製造のノウハウを広めてきた。

川崎市内で初めて小口醸造のビールとして免許を取得し、「生田かいわい登戸商店街をうまい地ビールで活性化したい」と、2009年5月に開店した。

「クラフトビールは鍋とバケツがあればできる。大切なのは情熱。私は毎朝、イースト菌と会話をしながらビールを造っています」

和・洋・中・韓そろった料理も充実。ピンやペットボトルで持ち帰りも可能。手造りビール教室や音楽ライブも開催している。

※ブルーパブ「ムーンライト」＝神奈川県川崎市多摩区登戸1818☎044・930・1018　16時30分～23時（土・日は11時30分～）火曜定休。

▶ まろやかなビールは料理に合う…左が山中さん

▲ 「ムーンライト」の店頭